

敗者から見た、ベトナム近現代史研究

北澤直宏

Studies of Vietnam's Modern History from the "South"

KITAZAWA Naohiro

1. はじめに

私の専門は、東南アジアに位置するベトナムの地域研究です。地域研究とは、地域を総合的に理解することを目的に、多様な資料や調査手法を組み合わせる学際的な学問として知られています。とはいえ私自身は学部時代に歴史学を専攻していたせいか、行政文書や歴史資料のような文献がないと不安になるところがあり、どちらかと言うと文献読解と、そのための資料収集を目的とするフィールドワークを繰り返してきました。

このような私が、学部在学中から長年にわたり関心を寄せてきたテーマが、カオダイ教と言う新宗教になります。ベトナム国内では 70 万人程の信徒数を擁しており、国内第 5 位の規模を誇っている宗教ではありますが、あくまでもベトナム国内ならびに在外ベトナム人の中でのみ広まっている宗教ですので、御存知ではない方が殆どかと思います。実際、私自身この宗教に興味を持ったきっかけは学部時代に読んだ論文であり、「よく分からないから辞書で調べてみたものの、結局何だかよく分からなかった」ことが始まりでした。そのため肝心のベトナムに対しては長らく興味がなく、研究意義に至っては随分と後になるまで見つけることはできない始末であり、正にこの研究テーマありきで研究生活の多くを過ごしてきたわけです。

以下では、「これまでの研究歴」として私の問題関心ならびに研究内容について紹介した上で、「現在の問題関心」について説明し、最後に「授業への反映」として自らの抱負を述べたいと思います。

2. これまでの研究歴

問題関心：カオダイ教とは

カオダイ教は1926年、当時フランス植民地下にあったベトナム南部で誕生した新宗教です。儒教・仏教・道教やキリスト教など古今東西の諸宗教を下地に、「これらを超越する最後にして究極の宗教である」旨を自称しており、最終的な目標は人類の救済にあるそうです。なかなか

にインパクトのある主張ですが、既に述べました通りそれなりに信者は多く、特に本山が位置する地方都市タイニン省は、町自体がこの宗教の信者により開拓されてきた歴史もあり、その中心部は住民の 7 割ほどがカオダイ教徒であることも知られています。また、全国には 400 以上の教区を有しているのですが、各教区にある彼らの寺院は独特かつ鮮やかな装飾にあふれており、1 日 4 回行われる礼拝の時間には民族衣装であるアオザイを身にまとった信者たちが老若男女を問わず集まり、整然と礼拝を行うことを特徴としています。そのため上述の本山ともなるとテーマパークのようでもあり、タイニン省自体がベトナム南部の中心都市ホーチミン市と隣接していることも幸いし、同国を代表する観光地の一つとして連日のように国内外から多くの観光客を惹きつけています。

実際に先行研究では、奇抜な外見や複雑極まりない教団組織に言及したものが多く (Oliver, 1976 ; Smith, 1970b)、かく言う私の関心もそこに端を発していたのですが、いざ調査を始めてみると私の興味は早々に別の方向に移っていくことになりました。これは後に現地調査をする中で判明した事実なのですが、そもそもこの教団の教義や組織図はあくまで理念であり、過去から現在に至るまで何ら実態を反映したものではなかったからです。

むしろ私が興味を持ったのは、教団の歴史でした。この宗教はかつて軍事・政治組織としての顔も有しており、第二次世界大戦後から 1950 年代半ばまでは独自の宗教軍を保有し、その後は国会議員を複数名輩出するなど、国内政治に一定の影響力を有していたからです。1976 年以降は社会主義政府に批判され活動を縮小させていたのですが、にもかかわらず現在では政府により「ベトナム固有の宗教」とされ、文化的多様性を象徴する存在に位置づけられるようになっていきます。冷静に考えれば、教団の変わり身の早さに驚くだけでなく、政府による評価が短期間で変化している様も不自然ではあるのですが、その経緯については分かっておりませんでした。先行研究は押し並べて、1926 年の誕生から 1930 年代の拡大については詳細に描写する一方で、1940 年代以降の状況となるとその記述は途端に薄くなる傾向があったからです (Smith, 1970a ; Werner, 1981)。

ここまで述べて来ましたが、私がカオダイ教に関心を持ち始めた 2000 年代、既にこの宗教に関する先行研究には一定の蓄積があり、それらを通しておよその概要を把握することは可能でした。とはいえ、いつの頃からか漠然とこれらに違和感を覚えてしまっていたこともまた否めません。これをはっきり自覚し、ようやく先行研究と距離を置けるようになったのは大学院に進学し現地調査を終えた後となりますが、何となく抱いていた薄気味の悪さは、複数の先行研究が特定の言説に依拠してきたことに起因する、不自然なまでの内容一致が根本にありました。

1960 年代から 80 年代にかけて、カオダイ教に関する研究は欧米を中心に進められていました。しかしベトナム戦争の最中であったこともあり、当時の調査は現在のように行えるものではありませんでした。ゲリラ出没の可能性から、地方や郊外での移動には制限が課せられていることが多かったからです。それに加え、教団が発行している資料ではよく分からない専門用語が多用されており、読解するためには専門の辞典が必須となります。その結果として、多くの先行研究が頼ったのが特定の文献であり、それが 1940 年代にフランス人のカオダイ教徒が

記していた、フランス語による紹介本でした (Gobron, 1948)。そのため同時期、ほぼ同一内容とも言える先行研究が複数発表されることになるのですが、これらが更に引用し合うことで言説が再生産され、結果として教団の主張とほぼ同じ内容が“事実”として繰り返されるようになりました。

更に付け加えれば、この時代は農民運動を語る理論として、千年王国論やモラルエコノミーといった枠組みが多くの人を惹きつけていた時期でもあります。それは東南アジア研究においても例外ではなく、カオダイ教の勃興と拡大もまた「農民たちによる植民地支配への対抗」として解釈されるようになりました (Hill, 1971; Werner, 1981)。とはいえ率直に言ってしまえば、これらの根拠となっているのはフランス人信徒が布教のために記した書籍であり、そこにはどの程度の歴史的事実が含まれているのかは疑問が残ります。つまりカオダイ教の研究とは、理論ありきで一人歩きしてきた側面があるわけです。

幸いなことに、私が 2010 年代に行った現地調査では、半世紀以上にわたる公文書と教団内部文書を入手することができました。細かい話は避けますが、これらの資料を通して教団組織の権力構造の変遷についても把握できたのですが、それによると立教以来のカオダイ教において実権を掌握していたのは中産階級であり、そこに農民である一般信者が入り込む余地は全くありませんでした。そうすると、「これまで語られてきたカオダイ教とは、何だったのか」と考えざるを得なくなります。繰り返すように、時代の制約もあることから、先行研究を否定する気はありません。ただカオダイ教と言う小さな事例ではありますが、複数の手によって繰り返し引用されることで、曖昧なはずであった記述がいつしか当然の前提として受け入れられてしまった過程には、それなりにゾッとするものがありました。

ベトナムへの関心

不思議なもののですが、カオダイ教についての研究を続け多くの断片が見えてくる中で、私の関心は、この宗教の背後にあるベトナムの近現代史や社会に移っていきました。教団の歴史を理解するためには、ベトナムそのものを考えざるを得なくなったからです。とはいえベトナム現代史は、なかなか説明が難しいことも事実です。20 世紀だけを見ても、フランスによる植民地支配と独立、南北分断、ベトナム戦争、南北統一と社会主義化など激動の歴史を経験しています。そのため多くの専門書では、ベトナムの近現代史は支配政党であるベトナム共産党の歴史として叙述されることが一般的です。その視点を否定するつもりはないものの、私自身が首都ではなく地方都市で留学・調査を経験してきたこともあり、どうしても公定史観だけに依拠してベトナムを理解することには抵抗を感じるようになりました。

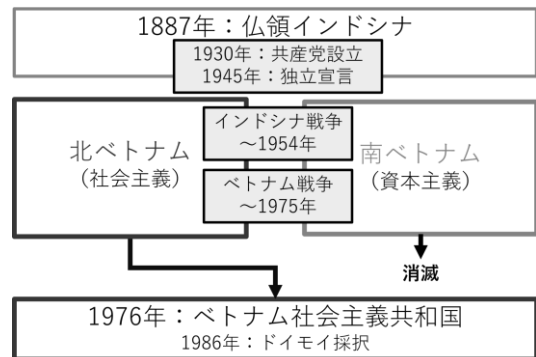


図1 ベトナム近現代史の大まかな流れ(筆者作成)

現在では統一され一つの独立国家になっているとはいえ、冷戦期のベトナムは南北に分断されていました。この両国の間に勃発したベトナム戦争は、最終的には社会主義を掲げるベトナム民主共和国（北ベトナム）が、資本主義陣営に属するベトナム共和国（南ベトナム）を倒し南部を解放することで終結を迎えました。これはベトナムにおいては独立と統一を果たした輝かしい歴史であり、そこに異論を挟むことはタブーでもあります。

しかし同時に、この歴史が同一国内に勝者と敗者を生み出し、特に敗者であるベトナム南部では終戦から半世紀が経つ今日においても多くの“しこり”が残されている点も否めません。もっとも、先述の通り私自身はそもそもベトナムに思い入れがあったわけではなく、冷戦やイデオロギー対立に特別な関心を持っていたわけでもありません。単に「カオダイ教が栄えているから」との理由から同国南部で調査を行っただけなのですが、結果として敗者に位置づけられる地域で多くの時間を過ごすことになり、地方の現場から中央の価値観に疑問を投げかける立場となってしまいました。

ただそこで改めて気付かされたのが、「南」と向き合うような研究が殆ど存在していない現実でした。これはベトナム戦争中から現在に至るまで、南ベトナムに対する評価が極めて低いことに起因しているようです。実際、過去の報道記事を見ましても「アメリカの支援ありきで成り立つ傀儡政権」「宗教を弾圧した独裁政権」「平和の敵」などその扱いは極めて悪く、国内外の研究者からも、そもそも研究に値する対象としては扱われてきませんでした。アメリカ政府による外交文書の公開が進んだこともあり、近年でこそ歴史研究における扱いは変わりつつあり (Miller, 2013)、ベトナム国内でも旧南時代のリバイバルブームが起きていたりもしますが、それでも一度貼られてしまったレッテルを剥がすことは極めて難しく、政治体制が幾度も変わっていることも災いし、1960年代後半以降の内情については今なお判明していません。

カオダイ教研究の概要

結果的に、カオダイ教と言う新宗教にベトナム南部の地域史と、外縁部ばかりに焦点を当てることになったわけですが、私自身はこのような試みにはそれなりの価値があると思っています。そもそも多民族・多宗教国家として知られるベトナムにおいて、その歴史観が一つであるはずがなく、それと同時に外国人研究者が敢えて同国の公定史観を鵜呑みにする必要もないと考えているからです。

前置きが長くなってしまいましたが、私はこのような問題意識の下、カオダイ教を通したベトナム政教関係の変遷について研究を続けてきました。2年間に及ぶ現地調査では、カオダイ教の信者宅にホームステイをしながら寺院での聞き取り調査や参与観察を行い、同時に公立図書館や文書館、個人宅での資料調査を進めました。冒頭で述べた理由から、肝心の論文執筆に際し使用したのは文献資料のみとなってしまいましたが、博士論文ならびにそれをまとめた単著（北澤，2021）では時代を大きく二つに分け、資本主義陣営に属していたベトナム共和国期（1955 - 1975年）と、1976年から現在まで続いている社会主義共和国期の状況を明らかにしています。

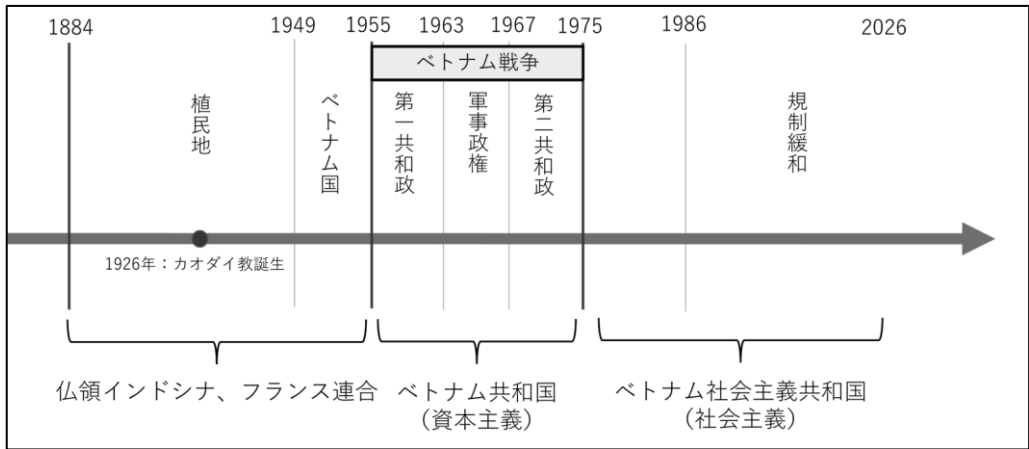


図2 「南」から見たベトナム政治体制の変遷（筆者作成）

上述の通り、南ベトナムは従来「悪政の代名詞」として批判されることが多く、宗教政策についても政府と宗教団体の対立ばかりが強調されてきました。しかし、公文書や宗教団体の内部資料を精査した結果、実際には政府はカオダイ教への直接的な介入を意図的に抑制し、一定の距離を保とうとしていたことが明らかになりました。それにもかかわらず、当時のカオダイ教側では政府に対する不満が繰り返し噴出しています。その背景には、宗教行政に関する明確な制度や方針が整備されなかったため、「宗教とは何か」「国家は宗教にどこまで関与すべきか」との基本的な認識が政府と教団の間で共有されず、両者の認識に大きな齟齬が生じていたことがありました。

もっとも、このような政教間の対立は 1950 年代には収まり、以降のカオダイ教は歴代の政権と良好な関係を築いていきます。これは、ベトナム戦争の激化に伴い国内統治に不安を抱えるようになった政府が、信者に対する動員力を有するカオダイ教を民生向上や治安維持に活用していったからでもありました。政府要人と交流するだけでなく、政府から資金や物資の提供を受けるようになったカオダイ教は、戦火を逃れて集まってきた人々を吸収し、1970 年代には黄金期とも言えるほどに組織を拡大させていきます。しかしそれは、戦時下と言う混乱期であったからこそその膨張でもありました。そのため 1975 年に戦争が終結した後ともなると、「宗教活動は時間と金の浪費に過ぎない」との社会主義政府の方針もあり、多くが教団を去っていくことになりました。

情報の閉鎖性もあり、社会主義体制下における宗教事情もまた多くが不明のままとされています。何となく「宗教弾圧が行われていた」との指摘は存在する一方で実態は判明していなかったのですが、確かに調べてみると 1970 年代後半から 80 年代にかけ急速な社会主義化が進められる中で、カオダイ教は組織の解体や財産の接収など厳しい統制を受けていました。しかし、そのような抑圧政策は信者の反発を招き、1990 年代に入ると政府は宗教政策を大きく転換します。社会主義体制の維持を優先した政府は、宗教を排除するのではなく、一定の統制の下で国家運営に組み込む方針を採用したからです。その結果、カオダイ教は公認宗教として活動を

再開することになりますが、それは戦前の組織や自律性が回復したことを意味するものではありません。国家の管理下で整備された「公認宗教制度」の枠組みは、宗教活動の自由をある程度ながら保障する一方で、人事権を掌握することで宗教団体を体制へと取り込む仕組みだったからです。

このような調査・研究を続ける中で強く感じたのは、中央政府や既存の研究が描いてきた通説と、地域社会で語られてきた歴史との間には、少なからぬ隔たりが存在している点です。とはいえ噂社会とされるベトナムにおいて、人々の語りを無条件で信用することは難しいのですが、それでも地方の図書館や個人宅で調査を行う過程において、中央では見られないような同時代資料に数多く出会えた経験は、改めてフィールドワークの魅力を感じさせるものとして印象に残っています。

3. 現在の問題関心：カオダイ教から離れて

現地調査を終え幾つかの論文を執筆したあたりから、私の関心はカオダイ教から離れてしまい、近年は新しい研究テーマに取り組んでいます。その理由としては、一通り調べた結果としてこの宗教に対する疑問が無くなってしまったこともあります。それ以上に、2年ほど研究を離れて外務省専門調査員として在外公館に勤めていた際、しばしば企業の人たちから投げかけられた「なぜカオダイ教（あるいはベトナム近現代史）を研究しているのか」との疑問に、自分が上手く答えられなかったことがあるのかもしれません。拙いながらも学術的な意義は説明してきたつもりではありましたが、それはあくまで狭い世界の中での話に過ぎなかったのかと衝撃を受けると同時に、自らの方向性を考え直す良い機会となりました。

依然として「なぜベトナムを?」「何のために東南アジアを?」との問いに対して十分に答えられているとは思いませんが、私自分の好奇心を前提としながらも、現代社会で起きておりかつ日本とも関係がある事象を明らかにすべく、現在は大きく以下三つのテーマで研究を進めています。

ベトナム南部の歴史・社会に関する研究

宗教に代わる大きな研究テーマとして、伝統芸能や大衆文化を通した文化史ならびにベトナム南部の地域史研究に取り組んでいます。具体的には、カオダイ教と並び「ベトナム南部における折衷主義の象徴」とされてきた、歌舞劇カイルオンの変遷についての考察ですが、これは幸い「20世紀ベトナム演劇の歴史研究」として科研費若手研究に採択されたこともあり、既にベトナムやフランスにおける現地調査を実施しています。

この内、現代文化政策に関する考察については研究論文としてまとめており、社会主義体制下におけるカイルオンの衰退の背後に、管理・介入こそしたがるものの関心には乏しいベトナム政府による文化政策があった点を指摘しました。1986年に採択されたドイモイ（刷新）政策により各劇団に対する補助金が削減される一方、当局による曖昧かつ抽象的な指示が残された結果、作家・俳優らの活動は次第に狭められていったのは当然とも言えるからです（北澤、

2025b)。今後は、20 世紀初頭から中頃の文化事情を把握すべく研究を継続することで、ベトナム南部の歴史ならびに社会への考察を深めていきたいと考えています。

ベトナムのナショナリズムに関する研究

また、ベトナムにおけるカリスマ・英雄表象といった、ナショナリズムに関する研究にも関心を有しています。このような研究は、私がこれまで経験してきた社会主義国やアジア諸国を専門とする研究者との共同研究から着想を得たものであり、具体的には英雄像や記念碑、墓地といった場が国家や地域社会の中でどのような意味を持ち、どのように利用されているのかを考察してきました。

その一部はこれまで数本の紀要論文として発表しておりますが（北澤，2023，2025a）、近年では同国のナショナリズムの影響は日本を含むベトナム国外でも見られるようになっていきます。ただこれは、ベトナム政府が諸外国との友好関係構築のために行っているのではなく、在外ベトナム人に対する締め付け強化を目的として展開している取り組みです。よく事情を把握していない地方自治体が何となく設置した結果、トラブルを引き起こしてしまう可能性も否定できず、実際そのような事例も発生しています。引き続きその動向を追うことで、国際情勢を理解する上での一助としたいと考えています。

在日ベトナム人社会に関する研究

また日本で教育・研究活動を行う以上は、日本社会についても考察していきたいと考えています。私は 2015 年以降、定期的に日本国内のベトナム系宗教施設を訪問し現状把握に努めておりますが（北澤，2016）、ここ 10 年ほどの間に日本社会とベトナム系住民との間の差異や衝突は拡大し、良くも悪くもベトナムはすっかり有名な存在となってしまいました。社会問題にもなっただけでなく、彼らですが、これらを多文化共生のような文脈で語るのではなく、組織的ネットワークやそれに対する政治介入の観点から分析することに関心を持っています。

研究や実務を通して私が見てきたベトナム人社会とは、価値観や政治的立場の違いから容易に派閥を形成し対立構造を生み出すものでした。彼らは自らの利益のために政治権力の介入を求めることも珍しくはないのですが、傍目には理解し難い彼らの行間やその背後にある権力構造はどのようなものなのか、自身の経験と地域研究と言う専門性を生かして考えて行きたいと思います。

4. 授業への反映

以上で述べてきたように、これまで私は「何となく面白そうだ」と感じたテーマを出発点として研究を進めてきました。その経験から、本学での教育においても、学生一人ひとりの興味や関心を尊重した学びを大切にしたいと考えています。そのため授業では、学生にとって身近な日本の事例を取り上げ、それを足掛かりとしてアジアの多様な話へと視野を広げられるよう心掛けています。異文化を学ぶことは、単に海外の実情を知ることではなく、自文化を相対化し、自社会を新たな視点から見つめ直す機会にもなると感じているからです。そのためには必

然的に私自身の学びを深めていくことも求められますが、学生の興味を引き出し、期待に応えられるよう努めていきたいと思います。

本学を含めこれまでの教育経験を振り返ってみると、学生のリアクションペーパーやレポートにおいて「～とされる」「～と言われている」といった表現が頻繁に登場してきます。もちろん、このような表現自体が誤りと言いたいわけではなく、私自身も本稿をはじめしばしば使用してはいるのですが、しかし同時に、このような表現が多用されることで「誰がそう言っているのか」「どのような資料に基づいているのか」といった視点が曖昧になってしまうことは危惧しています。同様の傾向は昨今話題に上がる生成 AI においても顕著ですが、このように一般化された定説の背後には、必ず誰かが作り上げた歴史像や価値観が存在しているからです。もちろん、あらゆる事柄を疑い続けることが望ましいとは考えていません。しかし、既存の知識を無条件に受け入れるのではなく、「なぜそのように語られているのか」「別の見方はないのか」と問い直す姿勢を身につけることは、大学教育において重視すべき点の一つと考えています。

そもそも多様なアジアを学ぶのであれば、他者と同じ対象を同じ見方で理解する必要などないのかもしれませんが。もちろん先行研究を踏まえることは教育者・研究者として不可欠です。しかし突き詰めると、自分自身の興味関心に従って物事を探求し、それが社会の役に立つならば、それに越したことはありません。とはいえ私のカオダイ教研究は、(資料に率直だったからだとは信じてはおりますが) 調査の過程でお世話になったベトナム政府ならびにカオダイ教関係者にも見せ難い内容となっておりますので、上記の理想を実現することが決して容易ではないことも承知しています。

それでも、研究や学びの原点には「知ることの楽しさ」があって欲しいとも感じています。それがたとえカオダイ教のような小さなテーマや対象であっても、自分なりの視点から歴史や社会を見つめ直してみると、それなりの発見や問いが生まれます。このような面白さを私自身が大切にすると同時に、一人でも多くの学生たちと共有していきたいと考えています。

[付記]

本稿は、2026 年 6 月 24 日に開催された文化社会学部研究交流会で行った報告の記録に、加筆修正を行ったものである。

引用文献

北澤直宏 (2016) 「日越仏教関係の展開 留学僧を通して」大澤広嗣編『アジア遊学 (196)

仏教をめぐる日本と東南アジア地域』、勉強出版、65-82 頁。

北澤直宏 (2021) 『ベトナムのカオダイ教 新宗教と二〇世紀の政教関係』風響社。

北澤直宏 (2023) 「ベトナム文化外交の諸相 ホーチミン像の海外展開を通して」『観光学研究』22、205-216 頁。

北澤直宏 (2025a) 「現代ベトナムにおける英雄表象 党幹部の顕彰施設を通して」『観光学研究』24、143-150 頁。

北澤直宏 (2025b) 「現代ベトナムにおける歌舞劇カイルオンの変容：文化政策を通して」『ア

ジア・アフリカ地域研究』25-1、30-56 頁。

- Gobron, Gabriel (1948). *Histoire du Caodaïsme : Bouddhisme renoué, Spiritisme annamite, religion nouvelle en Eurasie*. Dervy, Paris.
- Hill, Frances (1971). Millenarian Machines in South Vietnam. *Comparative Studies in Society and History*. 13-3, pp.325-350.
- Miller, Edward (2013). *Misalliance: Ngo Dinh Diem, the United States, and the Fate of South Vietnam*. Harvard University Press, Cambridge.
- Oliver, Victor L (1976). *Caodai Spiritism: A Study of Religion in Vietnamese Society*. Brill, Leiden.
- Smith, R, B (1970a). An Introduction to Caodaism I : Origins and Early History. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 33-2, pp.335-349.
- Smith, R, B (1970b). An Introduction to Caodaism II : Beliefs and Organization. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 33-3, pp.573-591.
- Werner, Jayne Susan (1981). *Peasant politics and religious sectarianism peasant and priest in the Cao Dai in Viet Nam*. Yale University, London.